

2024年(令和6年)

11月例会

日時：11月16日(土)14時より

(対面およびオンライン方式での開催、Zoom URLは後日配信)

会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1

講師：千葉大学(名誉教授)三宅晶子

題目：ヴァルター・ベンヤミンの思考における形而上的な時間—空間構造
—「歴史の概念について」における

「せむしの小人」「歴史の天使」「メシア」のいる風景—

司会：中央大学 縄田雄二

12月例会

日時：12月21日(土)14時より

(対面方式で開催のためオンライン配信はありません)

会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1

若手支部会員によるシンポジウム《比較芸術論の地平—「音楽」》

パネリスト：埼玉大学 高濱絵里子

19世紀におけるパリとウィーンの和声教育

—Ch.カテルとS.ゼヒターの和声教本を中心に—

早稲田大学 三浦領哉

音楽思想からアプローチする『国民楽派』比較研究の試み

—19世紀ロシアを手がかりに—

東京大学(院) 東崎悠乃

島村抱月と芸術座音楽会

—国民音楽の模索と芸術音楽の普及の試み—

司会：静岡大学 安永愛

INSIDE THIS ISSUE

1. 11月・12月例会案内
2. 例会要旨等
3. 例会会場案内
4. 東京支部短信

懇親会のお知らせ

12月例会終了後、懇親会を予定しています。詳細は12月初めに支部ホームページに掲載しますので、皆さまふるってご参加ください。

役員連絡会開催について

2024年11月例会終了後、対面およびオンライン方式で開催します。(役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、各種委員会委員長、事務局委員です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します)

11月例会発表要旨

ヴァルター・ベンヤミンの思考における形而上的な時間—空間構造
——「歴史の概念について」における

「せむしの小人」「歴史の天使」「メシア」のいる風景——

三宅晶子 千葉大学（名誉教授）

ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)の思考は、最初期から死の直前まで、「紫外線」のように不可視の「メシア的力」が潜在する空間の中で展開していった。本発表では、彼の最後のテキスト「歴史の概念について」(1940)に現れる3つの表象「せむしの小人」「歴史の天使」「メシア」に焦点をあて、形而上的な領域を包含した時間—空間構造を考察する。冒頭第Iテーゼでは、チェスプレイヤーの人形とそれを密かに操る「せむしの小人」の構図が示され、人形は史的唯物論に、小人は神学に喩えられる。では、ベンヤミンにとって神学とは何だったのか、初期のテキストまで遡り、「メシア」「神」「身体と肉体」「集団としての身体」「弁証法的イメージ」等が展開してきた文脈を辿る。その上で、小さくて醜い「せむしの小人」、死者たちと瓦礫を見つめつつも未来へと吹き飛ばされていく「歴史の天使」(第IXテーゼ クレーの「新しい天使」がイメージのもとになっている)、未来の各瞬間の「小さな門扉」を通して歩み来ることが「できた」と書かれている「メシア」(旧全集版の補遺B / 新全集版手沢稿末尾の第XIテーゼ)の像とは何か、各表象の由来と、これらの表象が作り出す風景を提示する。また、ベンヤミンの書き込みでは、この最後のテーゼは位置づけが確定せず削除されていた可能性もあり、彼の叙述と神学の関係についても検討する。以上を考察するならば、これらのテキスト群は、そのつどの危機の中で状況配置 = 星座 (Konstellation) を形成しつつ、ベンヤミンの全テキストと生と歴史を畳み込んだ「現在時」(Jetztzeit)を含む強烈な磁場になっていると言えるだろう。

ベンヤミンは、ヒトラーとスターリンが手を結んだ独ソ不可侵条約のショックと政治的・思想的危機感からこのテーゼを書き始めたが、亡命途上の自殺により未完に終わった。遺稿では、「我々の敗北の想起」を要求し、「これは慰めだ—もはや慰めへの希望を持たない者たちにとってのみ存在し得る、慰めなのだ」と記したが、テーゼでは「慰め」の部分は削除した。彼ら希望なき人々の敗北を、「現在の危機に対する研ぎ澄まされた意識」をもって想起することが私たちに要求されていることを、ともに考えたい。

12月例会発表要旨

若手支部会員によるシンポジウム《比較芸術論の地平—「音楽」》

19世紀におけるパリとウィーンのと声教育 ——Ch. カテルと S. ゼヒターの和声教本を中心に——

高濱絵里子 埼玉大学

ジャン＝フィリップ・ラモー (Jean-Philippe Rameau, 1683-1764) の『和声論』(1722) は、バス音に付された和音数字 (和音の響きをバスからの音程で表したもの) に沿って即興的に和音を奏でていた同時代において、和音を生成する理論上の「根音バス」の進行を説き、音楽の骨格を理論的に明らかにしたことで当時の音楽に大きな発想の転換をもたらした。音楽理論史におけるその重要性は今日にいたるまで広く認識されているが、協和音を数比から、和音原理を自然倍音列から説明したラモーの一連の著作は、当時の科学を前提とした「理論書」であった。その後、1795年のパリ音楽院創立に代表されるようにヨーロッパ各地に音楽院が設立されると、和声がより教育的に扱われるようになり、19世紀には「和声教本」が数多く出版された。パリ音楽院では、根音バスの進行に基づくラモーの和声理論からもっとも距離を置いたとされるシャルル＝シモン・カテル (Charles-Simon Catel, 1773-1830) の和声教本が教科書として採用され、同院における理論的思考の中核として、19世紀の間大きな影響を持ったとされる。一方のウィーン音楽院では、前者とは対照的にラモーの理論を継承したジーモン・ゼヒター (Simon Sechter, 1788-1867) が教鞭を取り、彼の教育は A. ブルックナーに受け継がれ、さらには A. シェーンベルクの和声の進行理論にも繋がったとされている。両者はパリ、ウィーンそれぞれの19世紀の和声教育の基盤になったものとして重要視されながらも、その実態はまだ十分に明らかにされていない。カテルとゼヒターの和声教本を、教育的視点から読解し、文化として括られやすい音楽において、その理論化と教育の方法論の違いに、それぞれの音楽文化そのものの特徴があるのではないかとすることを本発表にて明らかにしたい。

音楽思想からアプローチする『国民楽派』比較研究の試み ——19世紀ロシアを手がかりに——

三浦領哉 早稲田大学

19世紀後半にヨーロッパ周縁地域において盛んに行われた一種の民族主義的音楽運動は、中学・高等学校の「音楽」、また高校「世界史」の教科書でも「国民楽派」として知られている。しかしこの運動を地域横断的に比較し音楽史上に位置づける試みはこれまでほとんど行われてこなかった。それは、音楽学の視座からはその地域的多様性を網羅しきれず、一括りに「それぞれの地域において民族的素材から芸術音楽を作り出す運動」としか評価できなかつたことに起因している。しかし、楽譜上に現れる音の表象そのものに焦点を置くのではなく、この運動においてどのような音楽思想の展開がそれぞれの地域に存在し、そこにどのような差異が存在していたかという点に注目することによりこれら地域間の比較が可能となる。音楽思想史はもちろん音楽学の課題の一つであるが、このような比較はむしろ文学研究の視点から行ってこそ、有効であろう。

本発表では19世紀ロシアにおける音楽思想の展開の特異性に注目し、東欧の他地域におけるその展開の仕方と比較することにより、特に以下の3点を「国民音楽の思想的ステップ」と位置づけ、それぞれの地域における展開を測る基準とする。

- i. 「何をもって自国・自民族固有の芸術音楽を規定するか」の議論があったかどうか
- ii. あつたとすれば、「既に存在する民族的素材を使う」以上の思想的根拠があつたか
- iii. あつたとすれば、そこに「ユニヴァーサルな音楽美学」が意識されていたかどうか

これらの視点から各地域の音楽思想の展開を跡づけることにより、「国民音楽」がどの地域においてどのような位相で議論されたかを概観する。またそれぞれの地域におけるこれらの議論の過程が、その後の芸術音楽の歴史における、それらの地域の「国民音楽」の受容史と大きく関わっている点について仮説を立て検討する。

島村抱月と芸術座音楽会

——国民音楽の模索と芸術音楽の普及の試み——

東崎悠乃 東京大学（院）

1913（大正2）年に島村抱月（1871-1918）が松井須磨子らと結成した芸術座は、トルストイ原作『復活』とその劇中歌《カチューシャの唄》の大流行と、新劇普及の役割を果たしたことで知られるが、その事業の一つには「芸術座音楽会」と称される音楽の団体もあった。芸術座音楽会第1回演奏会は、芸術座結成の翌月末、抱月と中山晋平（1887-1952）の企画により開催された。曲目には若手詩人と若手作曲家による新作歌曲9曲のほか、フォーレ（仏、1845-1924）、マクダウェル（米、1861-1908）、シベリウス（フィンランド、1865-1957）、パウル・ユオン（露、1872-1940）という当時にとっての現代音楽家の作品が含まれる前衛的なものであった。

同演奏会以前、1906（明治39）年に抱月が英独留学から帰国し、第二次『早稲田文学』を発刊して以降、同誌をはじめ『新小説』や『趣味』といった文芸雑誌上では国民音楽をめぐる評論が多く発表されていた。抱月は日本に固有の音楽の必要性を訴える一方、芸術座音楽会は「本当に音楽を藝術——自分達の生活そのもののための藝術として愛する者のみの催し」であると述べている。芸術座音楽会第1回演奏会は、国民音楽をめぐる文壇の議論と、新劇のみならず芸術としての音楽の普及を目指した抱月の努力の一つの成果であったと思われる。

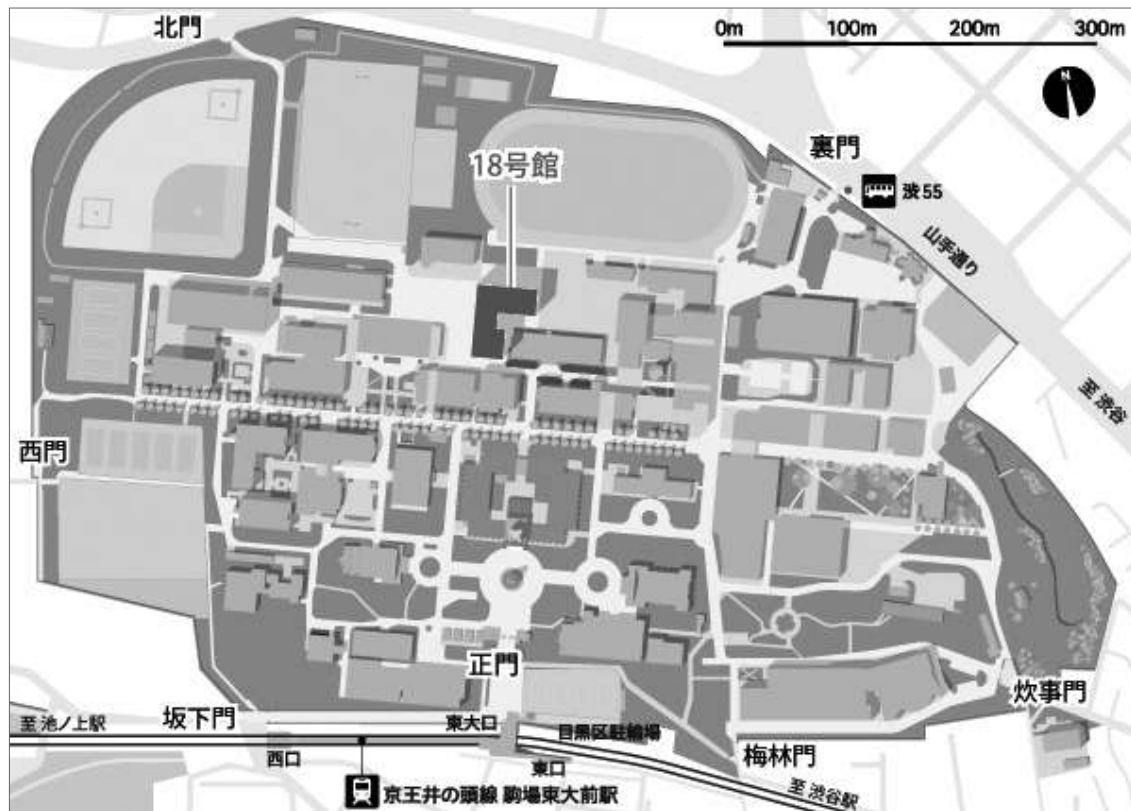
従来、抱月と西洋音楽の関係は、岩佐壮四郎の先行研究のほかにはほぼ言及されておらず、芸術座による音楽事業に関する研究も見当たらない。本発表では、芸術座音楽会の成立に至るまでの抱月と周辺の文学者による「国民音楽」をめぐる文芸雑誌上の言説を分析する。その上で、芸術座音楽会のプログラムや演奏会評を読み解き、同会が当時のどのような文脈の下、何を目指し、期待されたものであったのか考察したい。

11・12月例会会場

東京大学 駒場Iキャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

◆京王井の頭線「駒場東大前」駅下車



東京支部短信

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への投稿について

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』は、毎年一回、3月末日に発行されます。投稿者は、支部例会または支部大会における各自の発表をもとに、投稿論文の原稿を作成すること。但し、2024年度についても前年に続き、必ずしも研究発表や講演等の機会を得られなかった者も投稿を可とします。なお、多くの大学研究機関では電子的な方法で発表された論文についても、正規の研究業績として認められています。投稿論文の提出期間は11月1日から11月30日まで、送付先は下記の通りです。ふるって投稿ください。お待ちしております。

日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 椎名正博 pegasus@w2.dion.ne.jp

詳しい投稿規定および執筆要領、投稿用のテンプレートは東京支部ホームページに掲載されていますので、どうぞご覧ください。ご質問がある方は支部事務局に電子メールでお問い合わせください。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局(hikaku.tokyo@gmail.com)に氏名、所属、題目、連絡先(メールアドレス、電話)を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分(質疑応答を除く)です。

東京支部事務局より「お知らせ」の配信について

東京支部では支部会員のみなさまにメールマガジンの「お知らせ」をお届けしています。原則として毎月1日発行で、例会や支部大会などの情報を掲載しています。これまでお手元に届いていない方は、日本比較文学会東京支部の支部会員のページの「お知らせ」のウェブサイト(<https://www.hikakutokyo.com/mm>)のフォームにご記入のうえ「配信希望」をクリックして下さい。メールアドレス変更の場合も、お手数ですが、新アドレスで再登録をお願いします。

刊行のお知らせ

今橋映子・井上健監修『比較文学比較文化ハンドブック』

(東京大学出版会、A5・290ページ、定価3,190円)

学生、院生を主たる想定読者とする、比較文学比較文化研究の中事典型ハンドブックが、2024年9月2日に刊行されました。執筆者53名のうち47名は日本比較文学会会員です。

日本比較文学会東京支部ニューズレター 146号

発行人：宗形 賢二（支部長代行）

編集委員会（編集担当）

委員長：椎名 正博

委員：岩下 弘史 亀井 伸治 越野 剛 庄子 ひとみ 鈴木 美穂
中垣 恒太郎

事務局 事務局長：宗形 賢二 会計担当：土田 久美子

事務局委員：小泉 泉 芳賀 理彦 畑中 健二 蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒411-8588

静岡県三島市文教町 1-9-18

日本大学国際関係学部

三島駅北口校舎 607研究室(宗形賢二)

TEL：055-980-1924

E-mail: hikaku.tokyo@gmail.com